

扶桑讀本

尋常科用

三之上

不認定等

K120.8
66
3.1

K120.8

66

3.1

本 杖桑讀

第一 兵士

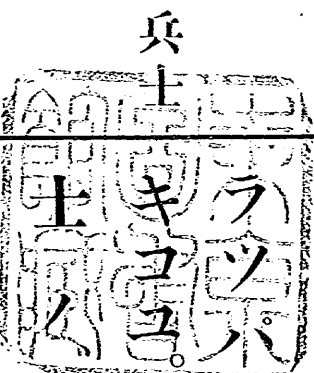


杖桑讀本第五

第一



オト、高ク



ノ聲、クツノ
アレ見ヨ、兵
レツヲナシ

テ、ススミユクナリ。

鐵炮

鐵炮ノサキニツケ

劍

タル劍ハ、キラメキ



且

テ、其様ノイサマシサヨ。
兵士ハ、國ヲマモルツハモノニ
シテ、一旦、事アルトキハ、イノチ
ヲステテ、タタカフモノナレバ、
吾等ノタフトブベキ人人ナリ。
汝等ハ、成長ノノチ、兵士トナリ
テ、國ノタメニ、忠義ヲツクスベシ。

成長

第二 五穀

日常

米は、田にううるいねの實にして、
吾等の、日常、食物とするものなり。

粟

五穀



米につきて、食物とな
るものは、粟、麥なり。
これに、きび、ひねを
あはせて、五穀といふ。
我國は、地味、よく穀物
にかないたるが故に、

全國

善

農業

全國、作らざる所なり、此故に、古、我國の名を、みづほの國といひなり。汝等は、さいはひに、此善き國に生れたれば、能く農業をつとめて、五穀をはぐめ、これ等のものを作出すべし。

重習第一

兵士は、劍をたび、鐵炮を擔ふ。
五穀とは、米、麥、粟、きび、ひにをいふ。
善き國に生れ、たる、幸を思ふべし。

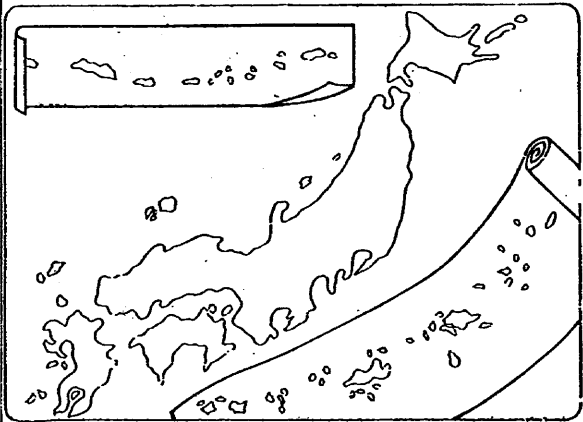
第三 日本國

氣候

秀美

地圖

我日本國ハ、氣候アタタカニシテ、穀物、ヨクミノリ、山水秀美ニシテ、其々シキ、言フベカラズ。今、此ニ畫ケルハ、我國ノ地圖ニシテ、四ツノ大ナル嶋ト、



本州

アマタノ小キ嶋嶋トヨリ成リ、其四方ハ、皆、海ニツツマレタリ。地圖ノ中ニ、最モ大ナルヲ、本州トイヒ、西南ニアルヲ、九州ト云フ。九州ト本州トノアヒダニアルヲ、四國トシ、本州ノ東北ニアルヲ、エゾト云フ。

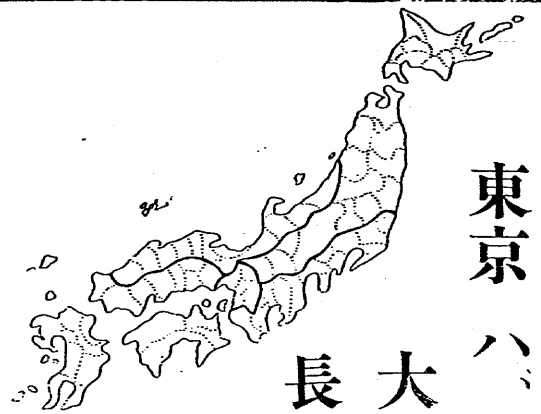
大別

全國ヲ大別シテ、キナイ、東海、

京都

東山、北リク、山イシ、山ヤウ、南海、西海、北海ノ八道、八十五國トス。

九州



東京ハ、東海道ニアリ。京都、大坂ハ、キナイニアリ。長サキハ、九州ニアリ。テ、神戸ハ、大坂ニチカク、ニヒガタハ、北リク、ハコダテハ、

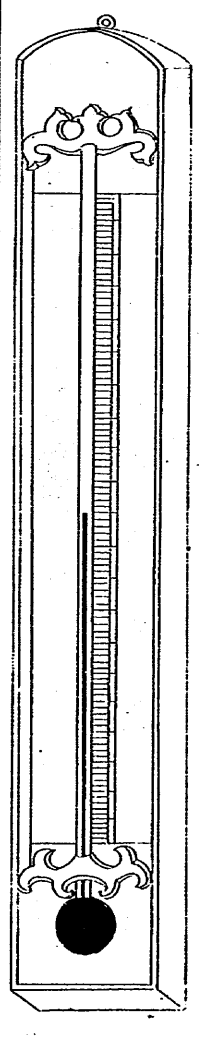
三府 北海、ヨコハマ、ハ、東海道ニアリ。
 東京、大坂、京都ヲ、三府トトナ
 へ、ヨコハマ、神戸、長サキ、ニヒガ
 五港 タ、ハコダテヲ、五港ト云フ。
 日本ノ人口ハ、日二月ニマシテ、
 餘 今ハ、四千餘万ノ多キニイタレリ。

重三府は、東京、京都、大坂にして、別に、五港の、
 習はんくわの地あり。
 第 四千餘万のはらからは、山水 秀美にして、圖
 二畫の如き國土にすめり。

第四 寒暖計

寒暖計
中空管

寒暖計は、中空のたまをろなへ
 たるガラスの管に、水かね、又は、
 アルコールを入れ、目をきざみた
 るいたの面にはめたるものなり。



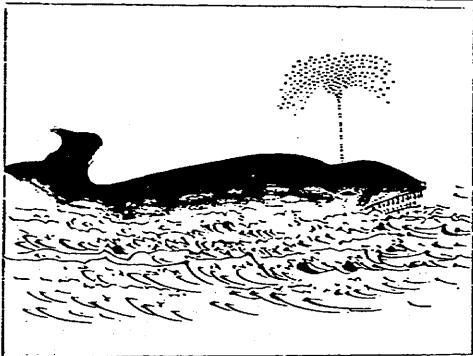
水かね、又は、アルコールは、暖き

空氣にふるれば、ふくれて、管内を
を上り、空氣寒ければ、ちぢまり
て、下にくだる。故に、目をか
ずへて、其上り下りを知る。
此器は、西洋よりわたりたるも
のにて、目に見はざる空氣の寒
暖を、よく、目にて知ることを
うべき、べんりなる 道具なり。

器西洋

第五 鯨

鯨



汝等ハ、鯨ヲ見タルコトアリヤ。
是ハ、魚ナルカ、獸ナルカ、汝等ノ
中ニハ、魚ト云フモノ
アラン、鯨ハ、其形、魚ニ
似テ、水中ニ住メドモ、
魚ニアラズ、大ナル獸
ナリ。スベテ、獸類ハ、形

獸類

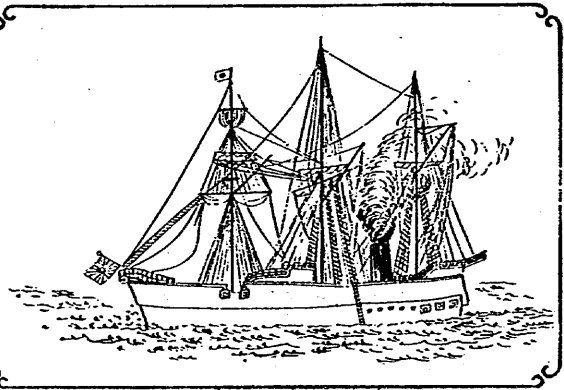
乳 血肺 呼吸

ヲソナヘテ生レ、乳ヲノミテソ
ダチ、血ハ、暖ニシテ、肺ニテ呼吸
ス、鯨ハ、皆、此性ヲ具ヘタリ。
其食物ハ、海中ニムラガル小魚ヲ、
水ト一時ニノミコミ、後、鼻ヨリ、
水ヲ、高く、空中ニフキ出スナリ。

重 鯨は、肺にて呼吸し、血暖にして、乳を以て、
習 生長する故に、獸類とす。
第 寒暖計は、水かれの上下によりて、空氣の
三 寒暖を知る器なり。

第六 汽船

笛 汽笛をならし、なみをけたてて、
港に入來るは、汽船
なり。汝等は、彼汽船
は、如何にして走る
とたもふや、汽船は、
石炭をたきて、ゆを
石炭 わかし、其トようきの



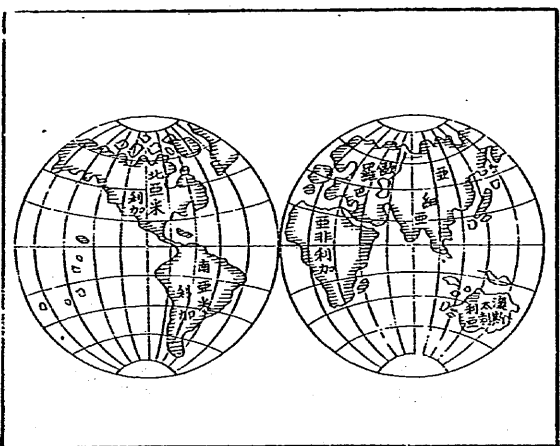
里數 烟筒

力によりて、走るものにて、一晝夜には、多くの里數を行くなり。彼船に具へたる烟筒は、石炭の烟を出す所なり、故に、汽船の走る時は、必ず、烟をふき出せば、はるかに走るものにて、あきらかにみとむることをうるなり。

第七 地球

地球

一周 思 向 進行



此セカイヲ、地球ト云フ。地球ハ、如何ナル形ト思フヤ。丸クシテ球ノ如シ。故ニ、地球ト云フナリ。人アリ、地球ヲ一周セント思ヒ、西へ西へト向ヒテ、進行セシニ、一タビ、前

ノトコロニカヘレリト云フ。
モシ、此セカイノ、平カナルモノ
ナリセバ、必ズ、西ノハシニイタ
リテ、ツクル所アラシ。
シカルニ、復、モトノ所ニカヘリシ
ハ、地球ハ、圓キモノナレバナリ。

復

重東に向ひて、進行せば、地球を一周して、復
習もこの所にかへるべし。
第四 烟筒、高く、石炭の烟をはき、汽笛をならし
て、万里のなみをほしるは、汽船なり。

第八 花園

内

今は、春のなかばなれば、風は、
暖に、日は、長く、一年の内にて、
最もよき時候なり。
見わたせば、此所も
彼所も、咲亂れたる
さくらのありさま
は、雲のかかれるが



如く、花のちらちらととびちる
様は、雪のふるかとうたがはる。
其外、草木の花咲きみちて、實
に、たもゝろき時せつなり。

今日は、幸、學校も休みなれば、我
等は、打つれたちて、彼花園に遊
び、花を見て、たのゝみ遊ばん。

第九 鶯

花園

鶯

解

之



鶯ハ、泳グコトヲコノムガ故ニ、
ツ子ニ、水中ニ入りテ遊ブナリ。

此鳥ハ、多クノ卵ヲ
産メドモ、其卵ヲ孵
スコトヲ知ラサルガ
故ニ、鶯ヲカフ人ハ、
其卵ヲ取リテ、雌鶏
ヲシテ、之ヲ孵サシ

雛

泳沈
溺

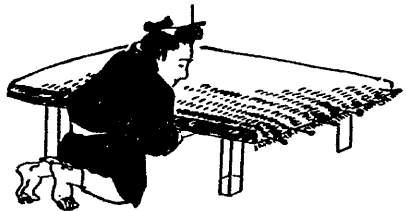
ム。サレバ、雌鶏ハ、オノガ子ト
思ヒテ、多クノ、雛ヲトモナヒ、
河ノホトリ、池ノミギハニ遊ベ
ドモ、何時モ、鶩ノ雛ハ、水ニ入
リテ、泳遊ベバ、鶏ハ、其沈溺レ
ンコトヲウレフルナリ。

重花園の内に、春草みちみてり。
習池の中には、鶩の雛泳ぎ、地上には、雌鶏
第五遊ぶ。
鶩の雛は、水に泳ぐも、沈溺れず。

第十 師ニツカヘテ忠

人は、恩をわするべからず。恩
を知らざるものは、人
にして、鳥獸にもた
ざるものぞかし。

大和
莊六
疊
何時のころにか、大和
國に、莊六といふ人あ
りけり。此人、疊造りの



師 忠兵衛

後 叶 貧 働

業をならはんとて、其ほとりの疊
師忠兵衛といふを、師とたのみ、十
年の年きにて、弟子となり、に、師
は、其後、ふと、眼の病にかかり、
起ぬもままならず、業とること
も叶はで、病のそこにつきたれ
ば、いつか、貧しきなりはひとな
り、も、莊六は、師のために働

久



き、師のために、病をたすけて、
すこしもをこたらざりきとぞ。

第十一 ツツキ

さても、莊六は、年久
しく、師の病をみど
り、家の貧しきをた
すけしも、師の病は、
いはず、家に、子供の

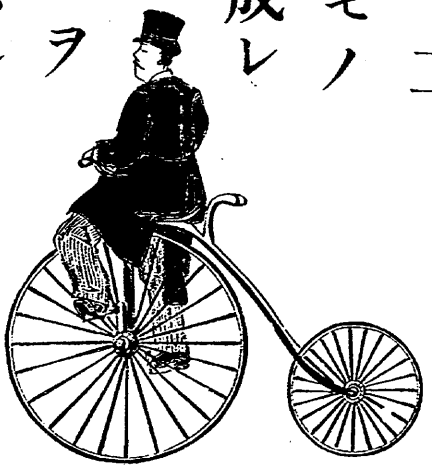
満 多かりければ、年き満ちても、師家をさらさず、其小兒の成長し、其暮しの立つまでとはと、晝は、ひめもす、夜は、夜すがら、稼ぎに稼ぎて、師をみつぎて、其恩にむくいたりとなり。

重 莊六の、師家に忠なりしは、後人の、よき習 手本なり。
 第六 莊六は、師家の貧をたすけ、久しき年月、稼ぎ働きて、家を守り、其暮しをみつげり。

第十二 自轉車

自轉車 種種

自轉車ニハ、種種アリテ、其形ヲコトニス。スナハチ、二リンヨリ成レルモノアリ、三リンヨリ成レルモノアルナリ。自轉車ハ、遠キ路ヲ行クニ、其廻轉スル



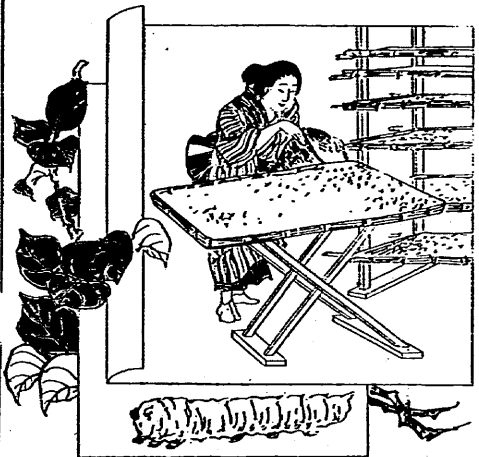
速
コト速ニシテ、人ノカラヲカラ
ズ、自カラヲ以テ行クモノナレバ、
マコトニ便ナル器カイナリ。

サレドモ、高低アル坂路ヲ上下ス
ルコト、自ザイナラザレバ、山路ヲ
行クニハ、便ナラザルナリ。

第十三 蠶ト桑

桑蠶
桑の葉は、蠶の食物となるも

のなり。蠶は、桑の葉の成長と、
ともに成長して、四たび眠り、四た
びねき、口より、絲を出して、巢
を作るなり。



さて、其作りたる巢
を、まゆと名づく。其
まゆより、絲をとる。
之を、生絲と名づく。

國産

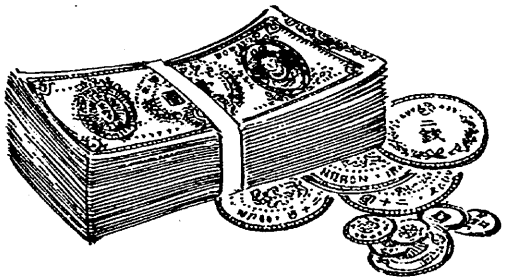
生絲は、我國産の第一に在るものにて、外國に賣出すこと多きものなれば、我國の人人は、桑をうゑ、蠶をやしなひ、ますます、國家のとみをまさんことを、はからざるべからず。

重習第七

桑の葉にて蠶をやしなひ、生絲を産せしむ。自轉車は、遠き路を行くに便なるものなり。

第十四 貨幣

賣買ヲナカダチシ、物ノアタヒヲサダメ、人ノ働ニムクユル等、何ゴトニモ通用シテ、便利ヨキモノヲ、貨幣ト云フ。貨幣ニハ、金、銀、銅、あるみノ四種アリテ、又、金



通用
貨幣
金、銀、銅

錢

厘

都合

二、五類、銀ニ、五類アリ、銅ニ、四類、あるみハ、タダ五錢ノ一類アルノミナリ。其金高二ハ、金ノ二十圓ヲ上トシ、銅ノ一厘ヲ下トシテ、其アヒタニ、何圓、何錢等、種種ノ貨幣アリ。紙幣ハ、其カロクシテ、持ハコビニ、都合善キモノナレバ、賣買等ニ、之ヲ用フレドモ、コレハ、タダ、

茅、摘 茶



貨幣ノ代用ニ外ナラザルナリ。

第十五 茶摘

八十八夜のころより、青みをねびたる茶の芽を摘みはどめ、一日ひと、男女の打つどひて、茶園の中に、にぎはしく働くなり。

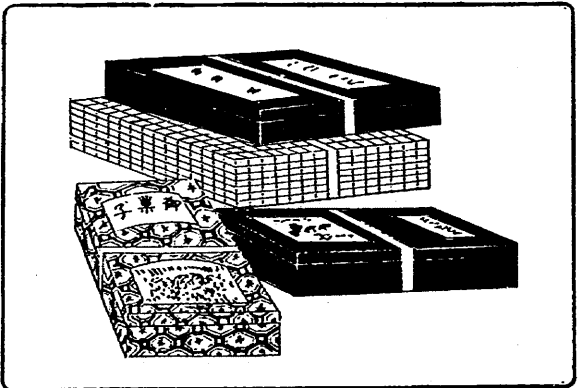
るもろも、茶は、我國より、外國に
賣出すもの多くして、其あたひ
高く、年年、御國をにきすること、
大なるものなれば、草木の中に
ても、ことに、たつときものごと、
人人のもてはやすものなり。

重 通用貨幣に、金、銀、銅、アルミの四種あり。其
習 高低は、圓、錢、厘を以てわかつてり。
第 茶の芽を摘みて、茶をせいす。其茶に、
八 種種の名あり。

第十六 紙細工

半紙
奉書

紙ノ種類ハ、多ク、半紙アリ、奉書、
洋紙等アリテ、日用
ニカグベカラザルモ
ノナリ。
此等ノ紙ヲ用ヒテ、
種種ノ形ヲ作ルヲ、
紙細工ト云フ。



細工

箱

其細工ハ、多ク、イタ紙トイフ、アツキ紙ヲ以テ、下地ヲ作り、其上ニ、美シキ紙ヲハリ、色色ノカザリヲナスモノニシテ、クワシ箱等ヲ作ルコト、最モ多キモノナリ。

第十七 カシコキ子供

善吉といふ、かしくき子供ありき。常に善き心がけありて、自らよく

決

することは、決して、人の力をかることなかりき。

靴



一日、母より、ぬひはりをかり、絲をもらひて、木のがやぶれたる靴をつくるひしが、子供ににぬほどに、見事に

出来上りたりとぞ。
是は、いささかのことなれど、人は、たれも、此心がけあらまほしきことなり。汝等も、も、木の草りの如きもののやぶれるときは、手づからつくろひて用ふべし。

重半紙、奉書、洋紙等にて、紙細工の箱を作
習る。
第九善吉は、常に善き心得をもち、靴のつくろひも、決して、人にたのまざりき。

時宗 執權 蒙古 忽必烈

支那

第十八 北條時宗

北條時宗ガ、執權タリシコロ、蒙古ト云フ國ニ、忽必烈ト云ヒテ、スグレタル王アリシガ、支那一圓ヲ打取リテ、國ノ名ヲ、元トアラタメ、イキホヒ、四方ニ



無禮

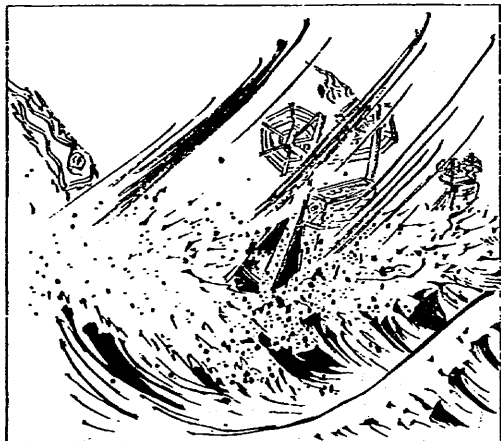
斬

ヒビキワタリヌ。
忽必烈ハ、我日本ヲモシタガヘン
ト思ヒ、タビタビ、ツカヒヲオクリ
シカド、時宗ハ、彼ガ無禮ヲセメ
テ、返書モアタヘズシテ、オヒ返シ
シニ、二タビ、ツカヒヲオクリケレ
バ、時宗、之ヲ斬リコロシタリ。

第十九 づづき

千艘

敵



サレバ、忽必烈ハ、千艘バカリノ
大船ニ、十萬アマリノ兵士ヲ
ノセテ、我國ニセ
メヨセケリ。
其イキホヒ、ハナハ
ダツヨカリシモ、我
兵、スコシモオソレ
ズ、敵ノ船ヲトリ

マキテ、サンザンニ、セメ立テタリ。
此時、大風、ニハカニ吹キオコリテ、
敵ノ船ハ、ノコラスクツガヘリ、
海ノ水クツトナリケレバ、十万
人ノ敵ノ内、生キテカヘルモノ、
ワヅカニ、三人ノミナリキトゾ。

重習第十

執權 北條時宗 は、元の 忽必烈 が 無禮 を こ
がめ、せめ来る 蒙古 の 敵兵 を うち平げ、 敵船
數百 を くつがへしたり。

第二十一 螢

頭赤

螢は、頭赤く、羽黒く、四つのつ
ばさをもてる、小き
蟲にして、田のくろ、
又は、川のほとり
に成長す。
晝は、草にかくれ
て、出でざれども、夜



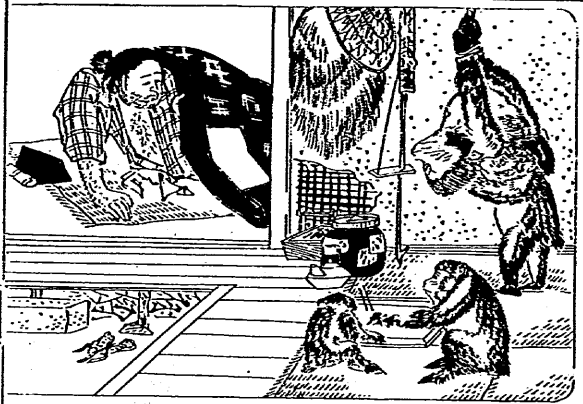
宜

に入れば、光をはなちて、四方に飛びまわるなり。
されば、月くらく、風少くして、いづかなる夜は、螢を捕ふるに宜しく、螢火を見るに妙なれば、舟をうかべて、川に遊び、歩をはこびて、野に遊ぶもの多し。

第二十一 子猿の孝行

獵夫 匹猿 歸

皮



ムカシ、シナノノ國ニ、一人ノ獵夫アリケリ。アル日、獵シテ、一匹ノ大猿ヲ得テ、持歸リシガ、日モ、ハヤ、クレタレバ、明日ヲマチテ、皮ヲハガント、其夜ハ、イロリノ上ニツリオキテ、寝子タリ。

死

獵夫ハ、夜半ニ、フト、目ヲサマシ
ケレバ、二匹ノ子猿ハ、死ニタル親
猿ヲ、コゴエタルモノト、ヤ思ヒケ
ン、カハルガハル、イロリノ火ニテ、
手ヲアブリ、親猿ヲ暖メテ、カイ
ハウシ井タリトゾ。

重習第十一

螢は、頭赤く、羽黒き、小蟲にて、光をはなち
て飛ぶ。
死にたる親猿を、多くの子猿は、火にて、
暖めいたはれり。

枇杷

第二十二 枇杷

すべて、草木は、秋より、冬になれ
ば、花も葉も、枯れしぼむもの多け
れども、枇杷は、其葉、
青青として、白き花、
雪ををかして、むらがり
咲くなり。
唯、其花の小なると、

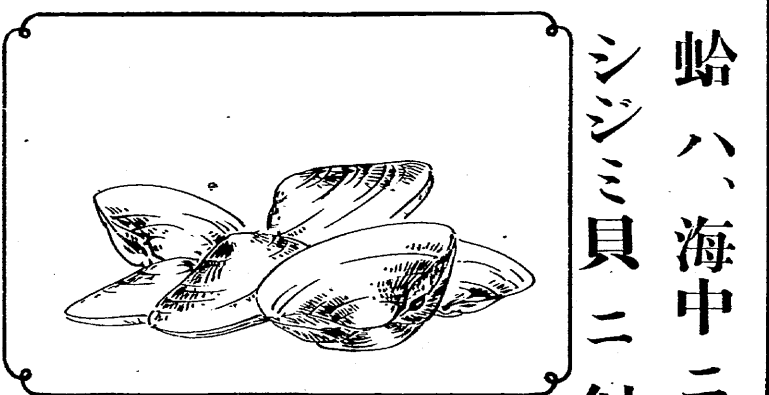


熟 肉 黄 個

花に、香氣の無きとにより、梅の如くに、人に愛せられざるのみなり。枇杷の實は、六七月ごろに熟し、肉やはらかにして、汁多く、味はなはだ宜しく、皮の色は、枇杷色とて、美しき黄赤色をわび、一ふさに、數個の實を持つなり。

第二十三 蛤

蛤 貝 沿海



蛤ハ、海中ニ生スル貝ニシテ、形シジミ貝ニ似テ、大ナリ。我國、沿海ノ地、産出スル所少カラズ。東海道ニ、時雨蛤、やき蛤等ノ名物アリ。其味、美ニシテ、貝類中、ヤヤ、上等ニナル

モノナリ。

貝ガラニ、白、又ハ、スヂ、ブチナド
アリテ、美シケレバ、種種ノ遊ビ物
ヲ作ルニ用ヒ、又ハ、クスリヲ入
ルルニ用フ。其大キクシテアツキ
モノハ、スリミガキテゴ石ヲ作ル。

重習第二十

枇杷は、其花 香氣 なければ、其 實は、はな
はだ 美味 なり。
沿海 に 産する 貝類 中、蛤貝 の 上ひん なる
は、人 の、能く 知れる 所 なり。

第二十四 時鳥

てつぺんかけたかどなくは、時鳥
なり。其飛ぶことの
早くして、夏のはト
めに、夜な夜な、空中
をなきつつ、飛びま
はるなり。

時鳥は、古より、多く



歌詩

歌によまれ、詩につくられて、人にめでいつくしまる。

嘴

其形小く、嘴は、まがりてかたく、能く、木の皮をつきやぶり、其中

舌

にすむ毛蟲をさがし、長き舌にて、之を食ふ。足の趾は、前後、各二つ

自由

ありて、自由に、大木をよぢ上る、此の如き鳥を、きつつきと云ふ。

音信郵便

第二十五 郵便電信



音信ヲ通ズルニ、郵便アリテ、遠キ所ニモ、日ヲサダメテ、音信ヲナスコトヲ得ベシ。郵便ニハ、ハガキト、切手トノ二ツヲ用ヒテ、手紙ヲヤリ取リシ、

電信

又、外ニ、小ツツミ郵便トイフモノアリテ、荷物ヲハコブモノモアリ。又、音信ヲ通ズルニ、電信ヲ用フ。電信ハ、エレキノ力ニテ、言葉ノフガフヲ用ヒ、千里ノ遠キ所マデモ、マタタクマニ、用事ヲ通スルナリ。

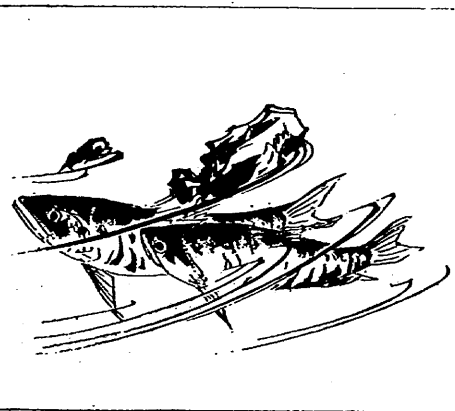
重習第三十

郵便、電信、電わの三つは、皆、音信を通ずるものなり。
時鳥は、舌長く、嘴かたく、足趾四本ありて、自由に、大木をよち上る。

鱗

第二十六 年魚

年魚は、川に産する魚にして、形長く、鱗細なり。其泳ぐこと、きはめて速にして、如何に、ながれの急なる川なりとも、自由にさかのぼること、れどろくばかりなり。



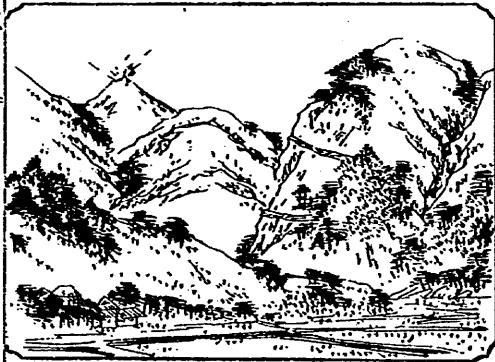
年魚の川に、れよげるを、見たる
ことありや。年魚の子は、寒き時
せつに、海にてるだち、春に至れば、
川に、さかのぼりて成長し、秋の末
に、川を下りて、海に入り、子を産
む魚なり。

年魚は、川魚の中、最も善き、香氣
ある魚にして、其味美なれば、上

品の料理に用ひらる。

第二十七 山

岡 岳
山ニハ、種種ノ名目アリ。其大ナ
ルモノヲ、岳ト云ヒ、
其小ナルモノヲ、岡
ト云フ。谷ハ、山ト山
トノアヒタニシテ、山
ミヤクハ、山又山ノ、



峰、峠

茂 麓

アヒツラナレルモノナリ。其チヤウ
上ヲ、峰トシ、峰ニ道アルヲ、峠ト
ス。峠ニ上ル道ヲ、坂ト云ヒ、山
ノ下ヲ、麓ト云フ。

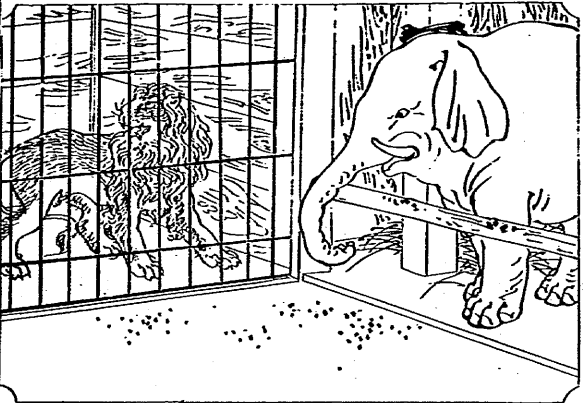
山ニハ、鳥飛ビ、獸走り、草木茂レ
リ。又クワウ山、火山等、種種アリ。

重習第十四

身長く鱗細くして、香氣よき魚は、年魚
なり。
山岳は、峰高くろびに、麓は、草木茂れり、岡は、
低き山にて、峠は、峰に道ある所なり。

動物園

第二十八 動物園



汝等は、動物園を見たることあり
や。動物園は、種種様
様なる鳥、獸、魚、蟲
などをかひなく所に
して、其中には、小さ
愛らしき鳥も、大きく
たろろしき獸もあり。

奇

象眼獅子

小さい奇れいなる蟲もあり。
さて、大なる頭と、大なる足とを
持ち、長き鼻を働かして、食物を
食ひ、又、鼻にて、水を吸ひて、之を
のむ象もあり、長きたてがみを
ふり、眼をいからして、一たびほゆ
れば、百獸のわろるる獅子もあり。

第二十九

ツツキ

太爪

大鳥には、眼の光すさまじく、ま
がれる嘴、するどく
して、太く、するどき
爪を持てるもの、小
鳥には、愛らしくして、
なき聲のわもろき
ものもあり。
汝等は、休日などに、



猛

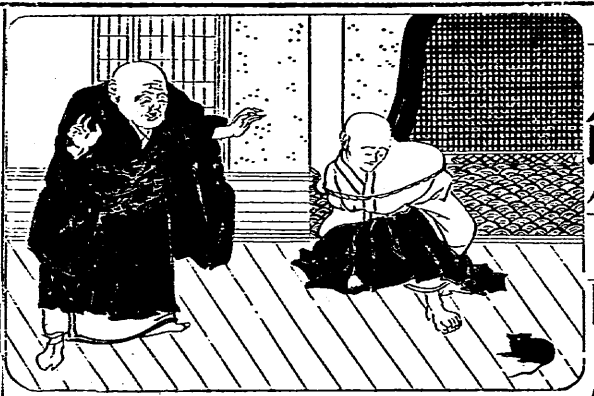
此園に遊ぶべければ、此等のものに、石をなげうち、又は、たはむるることなかれ。すべて、猛き獣や、どくある魚蟲などのかたはらにては、ことに、心をもちふべし。

重習第五十

象は、眼細く、獅子は、鬣長し、其ほか、あまたの奇なる動物あり。猛き獣や、強き鳥は、太き爪や、強きは持てり。

備中

歳 寺



第三十 雪舟

百餘年前、備中ノ國ニ、小田雪舟ト云フ、名高キ畫家アリケリ。十二三歳ノコロ、其父ハ、雪舟ヲ、アル寺ノ弟子トナラシメタリ。然レドモ、雪舟ハ、性、畫ヲコノミ

僧

堂

テ、經ヲ讀マザリケレバ、師ノ僧
 イカリテ、之ヲコラサンタメ、アル
 日、堂ノ柱ニシバリケリ。
 雪舟ハ、其クルシサニ、ナケドモ、
 サケベドモ、師ヲオソレテ、タス
 クルモノナカリキ。
 サテ、日モ、ハヤ、暮レントシケレ
 バ、師ノ僧ハ、雪舟ヲユルサン

鼠

終日

トテ、往見ルニ、其足下ニ一匹
 ノ鼠ノヲルヲ見ウケタリ。
 師ノ僧ハ、之ヲオヘド
 モ、アヤシヤ、サラニ動
 カザレバ、ヨクヨク見ル
 ニ、實ノ鼠ニアラデ、是
 雪舟ガ、終日、クルシサ
 ノ餘リニ、ナミダノシ



巧感

タタリモテ、足ノ趾ニテ書キタル畫ナリケリ。師ノ僧、ハジメテ、其畫ニ巧ナルヲ感シ、畫ヲ學バシメケリ。後、支那ニ至リシモ、師トスベキ上手ナカリケレバ、山水ヲ師トシテ、終ニ、名人ノ名ヲ得タリ。

重習第六十

小田雪舟は、備中の人にて、十二三歳の時、寺に入りしも、畫をこのみて、經を學ばず。師僧は、雪舟の鼠の畫に感じて、之を學ばしめたり。

家康

正則 召
丹波人



第三十一 三人カタハ

むかひ、徳川家康、せきがはらのたかひに、石田三成をやぶり、後、多くの兵士の中にて、手柄ありしものを召しける時、福嶋正則は、其士の隼人、石見、丹波と

いふ三人を進めけり。

然るに、隼人は、目一ひ、石見は、耳一ひ、丹波は、ちんばにてあり一かば、家康の近ドふは、たがひに、目と目とを見合せ、よくも、かたはのろろひたることよとあざけりたり。

第三十二 ツヅキ

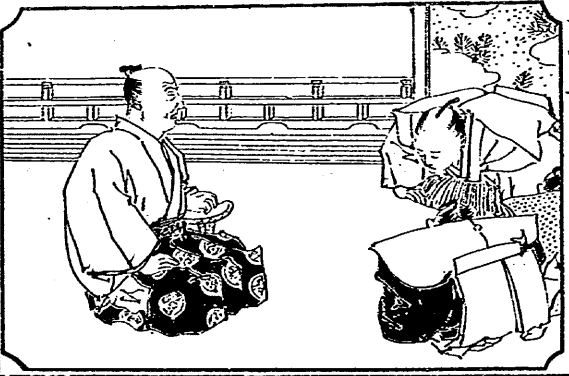
家康は、其後、一づかに、近ドふに

笑

世

むかひて、汝等は、何を笑ひ一ず、彼三人は、皆、名高き武士にして、世に知られたるものなり。

汝等は、彼三人の形をあざけれども、其心を知らず、よく、彼等の心を學びたらんには、



頼

いと頼もゝかるべし、各、つつゝむべしと、いひこらゝければ、皆、はぢ入りて、返すことはなかりきとぞ。汝等、もし、人のあゝきことを見るとも、決して、あざけり笑ふことなく、つつゝみて、たのれをかへりみよ。

重習第七十

徳川家康、福嶋正則の家來、隼人、丹波、石見の三士を召し、其手柄をしやうせり。家康は、三人の武ゆうをほめ、笑ひし人をいましめたり。

汗

第三十三 夕涼



汗ハ、流レテ背ニミチ、手足、力ナクシテ、病メルガ如ク、金石モトクルバカリノ熱サナリ。ヲリ柄、一天カキクモリテ、雷雨降り來リ、シバラクシテ、雲ヲサマレバ、

雷

涼

日ハ、早、西山ニカクレ、林ノ木ノ
葉ハ、タマヲツヅリテ、涼シサイ
ハンカタナシ。

忘老若

晝ノ熱サヲ忘レント、老モ若キ
モ、河ハラニ、出テ、又、舟ヲウカベ
テ、思ヒ思ヒニ、夕ノシミ遊ベリ。
風ハ、松ガ枝ニ、コトヲシラベ、月
ハ、波マニ、カガミヲクダキテ、マコ

トニ涼シキ景色ナリ。

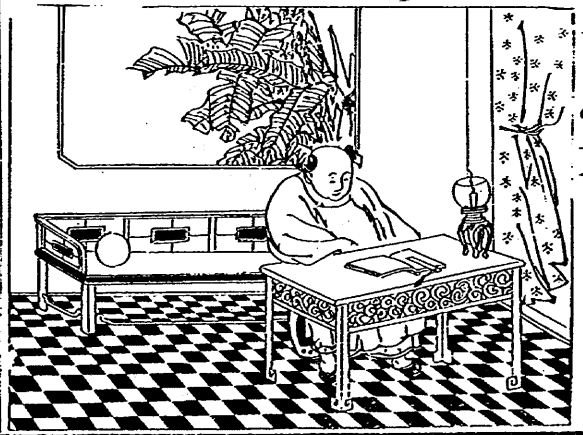
第三十四

司馬光

司馬光

好 讀 防

古、支那に、司馬光と
云ふ人ありしが、少
うして、學を好みた
りき。其、書を讀む
とき、深夜に、ねむり
をもよほすを、防が



枕 覺

んとて、圓き枕を作り、つねに、眠れば、之を枕して寝ねけるに、枕の轉がりて外るるをもて、忽ち覺む。覺むればまた書を讀む。此の如くして、晝夜、をこたることなくして、終に、大名を、世にあぐるに至れり。

重習第十

老若、男女、汗を流して、働きしも、雷雨一たび來りて、涼氣をおくれり。司馬光は、好みて、書を讀み、圓き枕を以て、眠を防ぎ覺せり。

明治二十七年

十二月十八日

印刷

明治二十七年

十二月廿八日

發行

編輯者

福岡縣福岡市博多下吳服町

鐵耕堂編纂部

發行兼印刷者

福岡縣福岡市博多下吳服町

鐵耕堂 竹田 芝郎

發賣所

福岡縣福岡市糝屋町

高田芳太郎

山口縣赤間關市入江町

山名松次郎

同

山口縣厚狹郡舟木町

中原卯兵衛

同

版權所有

定價九錢

